

紹介

横川末吉著

長宗我部地檢帳の研究

いわゆる長宗我部地檢帳は土佐全国にわたつて極めて完全に保存されている点でユニークであり、中世末―近世初期土佐国研究に就つて従来から貴重史料として、学界に注目されて来た。それ故、目下高知県立図書館からその印刷本を刊行中で、斯学徒の研究の便を計つている。しかし、一般の太閤檢地帳と異なり、記載様式が複雑で、傍証史料にも乏しいため、その研究はまだ充分ではなく、解明の緒にあつた。

本書は横川氏がご三十年來、かような檢帳にとつ組んで、「土佐史談」「社会経済史学」「日本歴史」「高知市史上巻」「大忍庄の研究」などに続々と発表されて来た地檢帳に関するたゆまざる御研鑽の集大成で、三部からなつてゐる。長宗我部地檢帳研究入門者にとつて、序の研究史及びⅠ・Ⅱ部は恰好の解説書であり、長年研究の学徒にとつても、

極めて多くの示唆を与えてくれよう。

Ⅰ部の長宗我部地檢帳の文献的研究は、著者が謙虚に断つてゐるように、すでに中田四朗(『三重大紀要』八)、井上和夫(『法制史研究』二)、平尾道雄(『長宗我部地檢帳』土佐郡上)、豊田武、横川末吉(近世村落自治史料集第三輯「土佐国地方史料」)などの研究があるが、氏はさらに従来明確であつたとはいへない地檢帳冊数の差異の原因を実証的に明確にし、地檢帳は構成上三六八冊が全く同一に扱えないことを指摘し、ことに山村である本川村檢地帳六冊は山内氏入国後のものであることを実証し、さらに元禄十年に現存の地檢帳が成立した歴史の意義、すなわち土佐藩元禄大定目に呼応する新帳の作製が土佐藩政の完成であると述べてゐる。

Ⅱ部ではⅠ部で考察した地檢帳の構成から、天正檢地が六尺三寸杖三百歩の丈量を用いながら、代という古い単位を残した矛盾を指出檢地に求め、慶長檢地が新田にとどまらず、仕直檢地であり、長宗我部氏の戦国大名より領国大名への変身の努力として捉え、地檢帳のはり紙などから、山内氏が地檢帳を利用して村切、農民の田地付などの他の先進地

帯の太閤檢地を行つた点等各檢地の性格を指摘し、土佐国の中世から近世への変容を浮彫りにしてゐる。

Ⅲ部は地檢帳の詳細な分析に基づいた長宗我部時代の土佐の社会構造の実証的研究で、過半の頁数が示すように本書の中心をなしてゐる。その分析の中心を登録人の知行関係におき、直轄地型、旧国人型、名主型、高級給人型、一領具足型、名子・被官型、水主型の類型に土佐国はほ全地域にわたり分類し、その各々の構造を究明するばかりでなく、その地域の分布を考察することにより、地域による進化の速度の違いを捉えようとしてゐる。幡多・安芸郡のような辺境の直轄地の増大や名主没落を機に新しい村の編成をはかる近世的動き、家老大身の散在所領や高知平野の一領具足の取立て、海岸漁村の水主層の把握などに長宗我部氏の領國的支配への努力を捉えようとしてゐる。

本書中の多くの地図、著者によつて作られた統計資料など今後大いに活用されることだろう。ともかく、傍証資料に乏しく、複雑極まる歴大な記載を、綿密な分析により克服された著者の御努力に敬意を示すとともに、漸

く長宗我部地検帳の研究も確固たる基盤が作られた感がある。(高知市立市民図書館発行。B6判三三〇頁、定価四八〇円)

(大脇保彦)

史林投稿規定

史林の投稿規定は次の通りです。奮つて御寄稿下さい。

◇資格 本会々員に限る。

◇原稿の長さ

○研究論文 四百字詰五〇枚程度

○研究ノート 四百字詰五〇枚以内

(以上には、四百字以内の要約二通〔一通は英文要約用〕添付のこと)

○資料紹介 随意

○学界動向 四百字詰三〇枚程度

○批判と反省 四百字詰三〇枚程度

○書評 四百字詰二五枚以内

○紹介 四百字詰三枚以内

◇送先「編集委員会」宛

◇なお、史林の論文掲載の順序は、たびたびお断りしておりますようにいわゆる巻頭論

文制を採用せず、日本史・東洋史・西洋史・地理・考古学の順、各専攻の中では時代・地域順となつていきます(研究ノート以下もこれに準ずる)。前以てお含みお下さ

編集後記

史林の委員になつて以来すつと、この欄は何を書くべき所であるのか、いつも当惑させられてきましたが、最近いよいよその感をよくしています。

本来は、各号の編集担当者が居て、その見解を述べる所であつたようですが、委員会の合議制が発達したとよるこぶべきか、雑誌の製作が事務機械的に進められていることを反省すべきか、ともかく、現在ではそのような性格は全く失せて、惰性的に委員が交替で書くだけの場になつており、たいがい、時候の挨拶に始まつて、会や委員会のお知らせが続き、時に委員の独自の感想をつけ加えて終るのが通例です。史学研究会の会則を御覧になればわかりますように、委員は何も権限をもつていないのですから、これは一種の公私混

淆であり、署名はして居りながら、誰が何に對して責任を負うているのか、一向に判然としません。

こういう、そこはかとなき曖昧さも日本的伝統といえるのかも知れませんが、学問を目的とする世界では、だんだん無くしていつたほうがよいように思われます。新しい体制が軌道にのつてきたのを機に、一度ゆつくり考えてみるつもりですので、どうか御意見をお寄せ下さい。蛇足ながら、以上は私個人の意見であります。(朝尾直弘)

史林

(第四五巻第五号)

一九六二年八月二五日印刷
一九六二年九月一日発行

定価 二百円

発行所

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
史学

研究会

理事 長 宮崎市定
振替 京都五一五五番

印刷所

京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社